

**春拾遺 : 俳句 : 文苑**

著者	紫溟吟社, ?耳, 巨足, 李王, 不割石, 渭南, 戦車, 岸三, 瓢郎, 紅鱒
雑誌名	龍南會雑誌
巻	1 2 1
ページ	6 6 - 6 7
発行年	1907-06-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6046">http://hdl.handle.net/2298/6046</a>

曉に別れの歌はよむものこそまゝ入りぬ縞蚊帳の中に  
 葉櫻に京のまろ寝の朝ばれや眸にせまる清水の塔  
 夕されば加茂に夜姿のうつくしき乙女むらがる川の風かな  
 白百合に染むべきは濃き山の紅世を泣く歌は巖に雕るべし

春拾遺

紫溟吟社

庭の芝焼けば尻火に東風が吹く 全  
 東風に飛ばす空になりたる菓子袋 全  
 菜の花の中に焔火のかすみ梟 不割石  
 綱かけて引く菜の花の渡かゝ 全  
 菜の花や香のせまり来る暮の瀛車 全  
 船造る音や垣根に菜種咲く 全  
 菜の花に京と浪華の午砲かゝ 全  
 掛茶屋の團子も土間も落花かゝ 渭南  
 青麥に囀の籠を据ゑるに梟 全  
 行脚から歸る草の戸隴哉 全  
 小田の草暮れて焼き梟歸る雁 全  
 海苔摘みの親船呼ぶや暮の鐘 戰車  
 海苔少し大鯛入れし籠の底 全  
 木蓮や星數ふべき湯のくもり 綠耳  
 木蓮や石段高く海を觀る 全  
 植うる翁よ畚の破より木實もる 全  
 水車大に動かであるや花大根 全  
 苜蓿積む馬の脊に立つ雲雀哉 全  
 宮の井戸重く蓋して松の花 全  
 龜鳴くや石に冷たき祈の灯 巨足  
 町の裏殘雪深き山聳ゆ 李王  
 鴉黒う梅にとまりぬ野の社 全  
 春興雜事 樹に雀子養ふ記 全  
 宮の修理垣除りて樹々の冴返る 全

まんまるの月が出でけり木の芽町 全  
 鉢植の大根花咲く都かな 全  
 鯛縄に蝶螺かぶりぬ春の海 全  
 實五石大瓠の種を蒔きにけり 全  
 繁縷や孟宗藪に藁の散る 岸 三  
 合歡の芽の泉に青く夏近し 全  
 倉の戸に蔦の花咲き夏近し 全  
 玫瑰や箱舟伏せし川の砂 全  
 貝殻に海苔搔く岩の平かな 瓢 郎  
 高潮の瀬鼻にくろき若布哉 全  
 虚ろなる杉に火の入る野焼哉 全  
 咲き過ぎの五形花深し蛙鳴く 全  
 肥に打てば苗代に飛ぶ蛙かな 全  
 田の岩に小さき花咲き蝶の來る 全  
 薄様に落雁白き二月哉 紅 鱗  
 冴ね返る咳嗽の薬や飴大根 全  
 雪解の木灌溪へ續きけり 全  
 氷解けて鹽取る山に登りけり 全

魚の餌に田螺つぶせば田螺の子 全  
 鳥の巢や林の中に積む杉葉 全

學寮俳句會報

大皿に氷運ぶやあを簾千 艸  
 山漸く月吐かむとす沖膾 全  
 蚊柱や行水捨てる茗茄畑 全  
 手洗ひつ二の船見るや沖膾 子 明  
 夏の月岬の茶屋に風激し 全  
 落し物燭して見るや門の臺 全  
 透き見わて醬油しみ鳧心太 全  
 血を吐いて一間悲しむ牡丹哉 全  
 背合せ机するける夏書の間 紅 鱗  
 老鶯や竹の樞の開 放し 全  
 葛水や山蟻浮きて草に捨つ 全  
 ふすくと灰に焼ける十薬哉 全  
 白檠わやはきながら下駄を洗ふ川 全  
 草合堂上堂下風渡る 瓢 郎  
 餉の拆や夏行の廊を打ちまわる 全  
 苔青き椋の根曲り山清水 全